



だてなりクン

# みやぎの明治村 とよま資料館だより

登米市歴史資料館・高倉勝子美術館  
発行/㈱とよま振興公社  
〒987-0702  
宮城県登米市登米町寺池桜小路2-1  
Tel: 0220-52-5566  
Fax: 0220-52-2630  
http://toyoma.co.jp  
発行日: 令和5年1月17日



## ◀◀ 特別編(伊達騒動 人物編) ▶▶ 第11号

// 伊達騒動って何ですか? //

伊達騒動とは、別名「寛文事件」とも呼ばれているもので、加賀騒動、黒田騒動及び伊達騒動が江戸時代の三大騒動として知られています。

「伊達騒動と原田宗輔」の著者である小林清治教授によると、「伊達騒動は、万治3年(1660)の仙台伊達第三代藩主である伊達綱宗の逼塞・隠居に始まり、寛文11年(1671)老中酒井雅楽頭<sup>※1</sup>邸での原田甲斐による刃傷とそれに続く伊達兵部以下の処刑で終わっている。」と記述しています。このことからすると、12年間に亘る仙台藩内の騒動のことを指していることになります。

寛文7年(1667)10月、登米伊達家と涌谷伊達家との間で二度目の野谷地帰属をめぐる問題が発生しました。伊達式部の知行地である桃生郡大窪村(現東松島市矢本町)と伊達安芸の遠田郡二郷村(現遠田郡美里町)との郡境論争が伊達騒動を最終局面へ導くことになりました。

寛文9年(1669)6月、桃生・遠田郡境について、幕府大老酒井雅楽頭の裁定を受け、茂庭主水姓元<sup>※2</sup>らが安芸を説諭し、両家とも不承不承ながらも、登米伊達家に2/3、涌谷伊達家に1/3の野谷地配分を受諾し、同年8月、目付今村安長らが検使となり、野谷地を実測して境塚を築いたと言われています。

この検分の際の依怙最戻(えこひいき)が遠因となり、安芸が幕府に伊達領内の不正を訴え出たとされていますが、平川新東北大学名誉教授が令和4年11月1日に著した「伊達騒動の真実」によると、谷地面積の測量集計結果は、ほぼ裁定通りになっていると記述しています。

図1は、現在の旧名鱈沼(なびれぬま)付近の写真です。



図1 旧名鱈沼遊水地の風景

// 伊達騒動の主な当事者 //

氏名	主な知行地 家格等	知行石高	生年月日		寛文11 年の年齢	年齢差 宗勝基準
			和暦	西暦		
だてひょうぶむねかつ 伊達兵部宗勝	一関藩 後見人	30,000石	元和7年	1621年	50歳	0年
たむらうきょうむねよし 田村右京宗良	名取郡岩沼 後見人	30,000石	寛永14年	1637年	34歳	▲16年
だてあきむねしげ 伊達安芸宗重	遠田郡涌谷 一門	22,640石	元和元年	1615年	56歳	6年
だてしきぶむねとも 伊達式部宗倫	登米郡寺池 一門	14,150石	寛永17年	1640年	31歳	▲19年
はらだかいむねすけ 原田甲斐宗輔	柴田郡船岡 奉行(宿老)	4,380石	元和5年	1619年	52歳	2年
しばたげきとももと 柴田外記朝意	登米郡米谷 奉行(一家)	3,000石	慶長14年	1609年	62歳	12年
ふるうちしまよしゆき 古内志摩義如	胆沢郡上口内 奉行(着坐)	3,300石	寛永8年	1631年	40歳	▲10年

図2 伊達騒動関係者の知行地・家格・石高・年齢等

図2は江戸時代初期に仙台藩で起きた伊達騒動の主な当事者の知行地・家格・石高や年齢を記したものです。

この図から年齢を基準にした場合、奉行の柴田外記が最高齢で、次いで一門の安芸、その下に奉行の甲斐と続きます。

この表は、年齢差等を単純に見られるように作成しましたが、式部は寛文10年に逝去していますので、正式なものとはなりません。しかし、仙台伊達家内における家格等概略を知ることができます。

※ 仙台伊達家において奉行職は他家では家老職に相当します。

※1 酒井雅楽頭(さかい うたのかみ)

※2 茂庭主水姓元(もにわ もんどうじもと)

※ 一石は150kgに換算できます。現在、30kgの玄米1袋平均8千円~1万円位で販売されています。

裏面もご覧下さい

一石だと約4~5万円となりますので、10,000石だと概ね4~5億円に相当します。



//奉行の原田甲斐とは・・・//



図3 政宗文書<sup>※8</sup>「大条薩摩守実頼宛書状」個人所蔵  
(元和4年力) 5月29日 ※8 文書「もんじょ」と読みます

奉行甲斐の母親「津多 慶月院」と「亙理伯耆宗根<sup>※3</sup>」は「茂庭石見綱元<sup>※4</sup>」と「香の前」の子とされています。

図3は政宗が当時奉行の大条薩摩守実頼<sup>※5</sup>に宛てた文書<sup>※8</sup>です。文面の概要は、石見が伯耆(この文書では又二郎)の屋敷を建てるため、下屋敷を壊すという話を聞いた政宗が、薩摩守から石見へ「自分に心あてがあるので、下屋敷を壊すことはしなくてよい」と明朝早く、石見へ伝えるよう指示しています。また、先々伯耆の屋敷を建てることも無用とまで書いています。この文書は元和4年(1618)に書かれたものと推定されています。文面から、石見の子とされている津多や伯耆の父親は政宗だと考えられます。津多は宿老の原田家に嫁ぎ、甲斐が誕生していますので、甲斐は政宗の孫になるのではないのでしょうか。

一次資料にはありませんが、平成2年5月に東和町教育委員会が監修し、編集を沼倉良之氏が行った「宮城東和町訪問記 涙・なみだ」が出版されました。この冊子の執筆者は伊達真美氏という方で、真美氏は伊達十八代当主泰宗氏のご令妹にあたります。この冊子の中で、慶月院は政宗のお姫様、甲斐は孫と記述をしています。

このことから、甲斐から見ると、仙台伊達第二代藩主忠宗は伯父、政宗十男兵部も叔父、登米伊達第四代当主式部は従弟になります。また、叔父の伯耆は亙理美濃守重宗<sup>※6</sup>の娘婿となりました。美濃守の孫が涌谷伊達家第二代当主安芸なので、伯耆を通して安芸とも親戚関係になっています。このように、伊達騒動に関係する人達は複雑に結びついていることがわかります。

さらに、登米伊達家初代当主伊達相模宗直<sup>※7</sup>の三男又三郎宗元は梁川を名乗り、甲斐の姉を正室としましたので、登米伊達家も原田家と姻戚関係にありました。

### //甲斐の叔父 亙理伯耆の屋敷 //

図4は宮城県図書館が公開している「叡智の杜Web」資料で、寛文4年(1664)の「仙臺城下繪圖」です。この絵図に伯耆(この絵図では日理伯耆)の屋敷のあった場所が書かれています。江戸時代は何度も屋敷替えが行われていますので、初めからこの地を与えられていたかどうかは不明です。

この地は仙台東照宮門前から南に伸びた道路(現東六番丁通り)の沿線近くで、近隣には茂庭主水の下屋敷や津田玄番の屋敷があります。伯耆は寛文9年(1669)70歳で逝去していますので、逝去する5年前の屋敷となります。



図4 「仙臺城下繪圖 寛文4年」  
(宮城県図書館 叡智の杜Webより)

※3 亙理伯耆宗根(わたり ほうき むねもと)、※4 茂庭石見綱元(もにわい わみ つなもと)、※5 大条薩摩守実頼(おおだ さつまのかみ さねより)、※6 亙理美濃守重宗(わたり ののかみ しげむね)、※7 伊達相模宗直(だて さがみ むねなお)

#### チョット一服 (正保の国絵図 正保2年(1645))

正保の国絵図は郷帳、城絵図と合わせて、正保元年(1644)に幕府から制作を命じられました。伊達領内の国絵図は正保2年に完成していたようです。この国絵図には、安芸の言う通り桃生郡深谷の山沿いに境界線が入っていたと言われています。後年、この国絵図を見れば、境界問題は生じなかったと、平川名誉教授は「伊達騒動の真相」の中に書いています。

しかし、正保2年から僅か22年後の寛文7年(1667)10月に登米伊達家と涌谷伊達家の郡境界問題が起こります。22年しか経過していないにもかかわらず、幕府に提出した絵図の副本を仙台伊達家が紛失したり、誰一人として境界決定したことを話題にしなかったということ、併せて、両村民が野谷地の領有について騒動を起こしていることを考えると、本当に両村了解の上で、境界が定まっていたのか疑問に思います。

#### イベント情報

登米町出身の彫金職人 谷関恭子氏の企画展「手しごとの彫金」を今月29日(日)まで高倉勝子美術館で開催しています。

恭子氏は企画展開催前日令和4年12月16日に亡くなりましたが、郷里の高倉勝子美術館での展示を待ち望んでいました。

#### 編集後記

登米に住んでいる私にとって、伊達騒動は興味深いものがあります。一般的に伊達騒動は郡境界問題の騒動と捉えられています。

しかし、安芸が問題にしたのは、郡境界問題に端を発して、兵部らの藩政全般の執政に対する不正等を幕府に訴え出たことだと考えられます。 鎌田

### 次号の告知

次号は「懐古館編」で、4月に発行予定です。

今年4月から懐古館を含めた「歴史資料館・高倉勝子美術館」の指定管理をとよま振興公社が受託することになりましたので、それを記念して「懐古館編」の資料館だよりを発行いたします。



「みやぎの明治村」SNS 随時更新中です！ チェックしてみてください。